

## 火山噴火の大災害を免れたアフリカでの事例

アフリカの火山が大噴火したとき、日本で研修を受けた現地の研究者が事前にこれを予知し、地元ラジオ局を通じて住民に避難を呼びかけた結果、大災害を未然に防ぐことができた。この話をご存じでしょうか。

アフリカの太陽が天高く輝いていたであろう2002年1月17日の午前8時過ぎ、コンゴ民主共和国の東端、ルワンダとの国境近くの商業で栄えるゴマ市は、20km北にある標高3450mの火山、ニイラゴンガの大噴火に襲われました。ゴマ市の住民は推定40万から50万人。住民届けなどは整っていませんから推定人口です。大量の溶岩流は、旧市街地の住宅、学校、病院など4,500棟を埋め尽くしました。ここはアフリカの旧ザイール共和国。うち続く内戦に長く苦しんできた国です。科学技術も通信網も未整備な地域。多くの被災者が出て不思議はない環境です。しかし、ここで、世界の火山災害の歴史上、最大級の住民避難が噴火の前に行われていました。

大活躍したのは、自然科学研究所のゴマ火山観測所で働くワフラ氏でした。火山噴火の危険があると判断したワフラさんは、ゴマのラジオ局に自ら出向いて「噴火が近い」と住民に避難を呼びかけました。この火山は、東アフリカ地溝帯の中、火山噴火の活発な場所にあり、1977年の噴火では2000人が亡くなりました。ラジオで火山研究者の避難の呼びかけを聞いた人々は、それを真剣に受け止めて遠く郊外や隣国のルワンダまで一時避難しました。その数は住民の半数にあたる25万人に及びました。この壮大なオペレーションの結果、この時の噴火による死者は50人から100人以下に抑えることができたのです。

ワフラさんは、JICA集団研修の「火山学・総合土砂災害対策コース」に参加するため1995年来日し、現東北大学名誉教授である浜口博之先生の下で噴火予知の研修を受けていました。

浜口先生は、現在もこの研修コースの運営のために当(財)砂防・地すべり技術センターが設置する「カリキュラム

委員会」の副委員長として貢献されています。この研修コースは1989年に開始され、これまで25ヶ国から182名の研修員を受け入れました。当財団は、関係機関のご協力を得ながら研修実施機関として研修の運営に当たっています。

浜口先生は、1971年、独立後10年を経たコンゴ民主共和国に赴任し、JICAの長期専門家として2年間、火山学の研究者を文字通りゼロから育ててこられました。そして40年、今もこの国に火山学を定着させるため、惜しみない努力をされておられます。

どこまでも誠意を貫く、あるべき日本人の姿を眼前に見る思いがします。

(企画部国際課 調査役 新井明男)



北海道有珠山で、コンゴ民主共和国などからの研修員への現地実習

## 世界の土砂災害 (2010その4)

(財)砂防・地すべり技術センター 企画部国際課

2010/11/1~2011/1/31			
発生日	国名	種別	概要
2010年 11月30日	Venezuela	崩壊	首都カラカス周辺にて40年ぶりといわれる豪雨があり、貧しい住民が住む周辺丘陵斜面の数十箇所で崩壊が発生、21名死亡。
12月5日	Colombia	崩壊	コロンビア第2の都市アンティオキア (Antioquia) 州メデジン (Medellin) 市北部ベジヨ(Bello)の、ラ・ガブリエラ (La Gabriela) 地区で、午後2時頃豪雨による崩壊が発生し、38名死亡、100人以上が行方不明。現場は市周辺部の貧困層が住む地区。この雨による洪水で170万人が避難生活を余儀なくされた。
2011年 1月12日	Brasil	崩壊・土石流	ブラジル南東部リオデジャネイロ州の州都リオデジャネイロ (Rio de Janeiro) から北東約100kmにある町テレゾポリス (Teresopolis) で、1月11日から降り続いていた大雨により、周辺丘陵斜面の至る所で崩壊が同時多発的に発生した。土砂は、直接山すその人家を襲ったり、土石流化して集落に流れ込むなどして、周辺の同州ノバ・フリブルゴ (Nova Friburgo) やペトロポリス (Petropolis) などの被害も合わせると、合計で803名が死亡し、ブラジル史上最悪の災害となった。